しに、水飜の一はいにみちず其心をかんじ、利休は宗匠の器量ありとゆるされし、唐物の茶入、利休見てほしく思ひ、右の藤四郎の脇指をうりて、七拾五枚に茶入をかい取、あまり見事なるにかんにたへ、不覺頭巾を取てなげし故、當座になげ頭巾と名付、茶之湯を被成しに、天然と名高く秀吉公被聞召及、被召出、三千石の領地を被下し、其より次第々々に名發達し、一天下の諸大名門弟となり給ひ、貴て和尚と被仰しゆへに、茶の宗匠を今の世まで和尚稱ス、此時よりはじまる、利休の別號を抛筌齋と云、宅地は上京本法寺の前に有、豐臣秀吉公此地を給ふなり、利休がまゆる所の鎖の間今にあり、末裔今程此所に住居し侍る、總じて茶之湯の世に行れ、今以人の取はやすは利休より此方全なる、其故中古開山なり、後おごり有て、禁裏より御いましめにあひ、逐電し自滅す、其時天正九年二月廿八日に死す、死後宗易と云、二條院の陵船岡山の麓に有、陵の上に五重の石塔あり、しを、其九輪を取て自己の塔とす、大德寺の內聚光院にあり、其塔の銘千利休宗易居士と有、天正九年ゟ元祿十五年迄百二拾二年に成、

〔長闇堂記〕秀吉公御上洛有て、天下治りおだやかにして、御身は大坂城にましく て後、御心もやすめ、御慰の品々、御茶湯をもあり、其時千宗易天王寺なり、宗及ならなり、宗久三人は堺より召出され、御領地被下、專御茶湯なれば、下々に至るまで此道たしなみあへり、南北に宗及弟子六十人計、宗易弟子三十人程有しを、秀吉公御師匠に召れしより、世の中皆宗易がゝりの茶湯とはなれる物なり、

〔晴豐記〕天正十九年二月廿六日、宗易、利休事也、曲事有之よりちくてん、大德寺三門に利休木ざうつくり、せきだといふこんがうはかせ、つへつかせ、つくり置候事曲事也、其ゑさい茶の湯道具新物共、くわんたいにとりかわし申たるとの事也、その木ざうじゆらくの橋の下はた物にあげられ、ぬしめしよりにました右衞門丞さかいこし申候由候也、見物にも有之由候、とりく のさた